

自然誌 だより

Natural history



三重自然誌の会情報誌 146号

2025年 12月

三重県内にもオオカミ標本があった

8月下旬、三重県総合博物館に所要があって立ち寄った際に、田村香里学芸員から神宮徴古館に所蔵されているというオオカミ頭骨の写真をみせてもらいました。帰宅してから徴古館のホームページを開くと、該当標本が同館農業館で展示されていることが案内されていたので、さっそく行ってきました。展示解説によると、この標本は松阪城の近くで松泉閣という旅館を営んでいた内田家の家宝として江戸期から伝わっていたそうです。産地が不明なのは残念ですが、県内唯一のオオカミ標本として貴重です。良く知られているように、最後のオオカミ標本が採集されたのは松阪市の西隣・奈良県東吉野村において1905（明治37）年のことであり、それほど時を経ずして絶滅したものとされています。オオカミは人々のロマンを掻き立てるようで、日本に外国産オオカミの導入を提唱されている方々もみえます。そうすることで、激増しているシカやイノシシの個体数が調整されると主張していますが、本当でしょうか。シカが急増したのは日本からオオカミがいなくなって100年近く経った1990年代からです。オオカミの存在した江戸期にもシカやイノシシによる農業被害が多発したことは、各地に残されているシシ垣が物語っています。クマをカワイイと思う人もいれば、オオカミを神格化してみる向きもあるかもしれませんが、野生は人の思惑通りには動かないということを理解すべきでしょう。最後に、情報提供者の田村さんにお礼申し上げます。



写真 神宮徴古館農業館に展示されているオオカミの頭骨標本。黒塗りされているのは、薬用目的で骨が削りとられるのを防止するためと思われる。

（清水 善吉：松阪市日丘町1386-17）

秋から咲き始めるホトケノザとその白花型

河 野 勝 行

ホトケノザ *Lamium amplexicaule* L.(シソ科)は春の畑地や路傍の雑草を代表する種の一つで(大井 1983),多くの日本人にとって馴染み深い種であり,筆者が住む伊勢平野にもごく普通に見られる.本種は1753年に大リンネによって今日使われている学名が初めて与えられた植物種の一つであるから(Linnaeus 1753),ヨーロッパにおいても普通に見られる植物であろう.なお,春の七草の一つとしての「佛の座」は鎌倉時代から名が挙げられているが,これは本種のことではなくキク科のコオニタビラコ *Lapsana apogonoides* Maxim. のことであり(牧野 1922, 1932; 森田 2010),やはり春の雑草として馴染み深い種である.

春の花として馴染み深いホトケノザであるが,いつの頃からか,まだ夏の名残のある秋から開花が見られることに気づいた.以来毎年観察しているのだが,やはり毎年のように秋から開花が見られ,冬の間も開花し続けることがわかった(写真1).三重県津市安濃町における筆者の観察結果を要約すれば,早い年には10月上旬から開花が始まり(写真2),徐々に増えるが厳冬期には一旦少なくなり,春先から再び増え始め,3月下旬~5月に最も多くなって,6月中旬にはほとんど無くなる,という経過であった.

ホトケノザが冬にも開花することは古くから知られていたが,その際通常の花ではなく,花冠が開かないまま受粉して結実する閉鎖花になる(牧野 1932).実際の筆者の観察でも,冬に閉鎖花は少なくなかったが,むしろ普通の花の方が目立っていた(写真3).なお,閉鎖花は冬以外の時期にも見られ,これについては,同属の近縁種でヨーロッパ原産の帰化種であるヒメオドリコソウ *Lamium purpureum* L. との間の繁殖干渉を避けるためだと推察されている(Sato et al. 2013).

ホトケノザの開花期に関して具体的な時期を記した文献は多くはなく,例えば大井(1983)には「5-6月」,佐竹ら(1985)には「4-6月」とあるが,オリジナルなデータに基づいた記録を記した文献は見つけられなかった.その他の多くの図鑑等でも,ホトケノザは春に咲く花として認識されており,冬季に閉鎖花ではない普通の花が咲くという



写真1 厳冬期の降雪の中での開花(2025年1月16日, 津市安濃町)



写真2 秋の早い開花(2019年10月10日, 津市安濃町)



写真3 冬には閉鎖花が多いが普通の花も目立つ(2023年12月27日, 津市安濃町)

記述は見つけられず、筆者による観察結果とは大きく異なっていた。

この違いが生じる原因として二つの可能性が考えられる。一つは、単に秋から冬にかけての観察報告が無かったということである。ホトケノザに限らず、普通に見られる雑草の一年を通した生活史に関する報告を見つけることは極めて困難であることから、この可能性は十分に考えられる。もう一つは、近年喧伝されている地球的規模の温暖化の影響である。冬の気温が上がり、ホトケノザが開花することが可能になった、という可能性である。この点については、今後検証するに値する仮説となりえる。

話は変わるが、ホトケノザに注目して観察しているうち、何度か白花の個体に出会った。花卉が純白になるだけでなく、葉や茎でも紫色の色素を欠いて緑色が際立つので、花がなくても識別が可能である（写真4）。本種の白花には「シロバナホトケノザ」という和名と *f. albiflorum* D.M.Moore という品種名が与えられており、花卉が白色になるだけでなく、葉や茎の紫色の色素を欠くとされている（Moore 1941）。この白花型は春だけでなく秋にも見られたので（写真5）、通常の型のホトケノザとの間に季節性に関する違いは無いのであろう。この白花型の頻度は極めて低く、筆者の大雑把な感覚として0.01%以下だと思われた。また、2か所でそれぞれ同じ場所で複数年続けて見られたので、紫色の色素の欠失は遺伝的に決まっているのだらうと思われた。

引用文献

- Linnaeus, C. 1753. Species plantarum, exhibentes plantas rite cognitatas, ad genera relatas, cum differentiis specificis, nominibus trivialibus, synonymis selectis, locis natalibus, secundum systema sexualis digestas. Tomus II. p.579.
- 牧野富太郎 1922. 春の七草の一であるホトケノザに就ての私の主張. 植物研究雑誌 2 (6) : 130-131. https://doi.org/10.5103/jjapbot.2_6_218
- 牧野富太郎 1932. 斷枝片葉 (其五十三). 植物研究雑誌 8 (1) : 36-42. https://doi.org/10.5103/jjapbot.8_1_1048
- Moore D M, 1941. White-flowered Forms of Some Arkansas Wild Flowers. Journal of the Arkansas Academy of Science 1 (12) : 25-27. <https://scholarworks.uark.edu/jaas/vol1/iss1/12>
- 森田潤司 2010. 季節を祝う食べ物 (2) 新年を祝う七草粥の変遷. 同志社女子大学生生活科学 44:84-92.
- 大井次三郎 (北川政夫改訂) 1983. 新日本植物誌 頭花篇改訂版. 至文堂, 東京. (初版 1953)
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 1985. フィールド版日本の野生植物. 平凡社, 東京.
- Sato Y, Takakura K, Nishida S, Nishida T, 2013. Dominant Occurrence of Cleistogamous Flowers of *Lamium amplexicaule* in relation to the Nearby Presence of an Alien Congener *L. purpureum* (Lamiaceae). IRSN Ecology Volume 2013, Article ID 476862, 6 pages <https://doi.org/10.1155/2013/476862>



写真4 白花型は花だけでなく葉や茎にも紫色の色素がない (2025年3月21日, 津市安濃町)



写真5 白花型は通常の型と同様に秋にも咲く (2022年11月16日, 津市安濃町)

(この かつゆき: 津市上浜町4-56-2)

中国原産チュウゴクアミガサハゴロモが三重県で大発生

ーカメムシ目ハゴロモ科の県内産全種の生態画像を添えてー

篠 木 善 重

昨年から、三重自然誌の会有志による川越町の生物相調査に参加している。昨秋、北部浄化センターの原野でアミガサハゴロモによく似た数頭の虫が陽の当たる樹木（樹種は不明）にいるのを見つけ、撮影（写真1）後に捕虫網を振ったところ1頭を捕獲できた。三重県産ハゴロモ科昆虫は、富田（2018）が3種（スケバハゴロモ、ベッコウハゴロモ、アミガサハゴロモ）の記録をまとめている。前翅前縁中央の白斑形状にアミガサハゴロモとは異なる違和感を感じながら、同定ラベルを付けられぬまま一年が過ぎた。

今秋、この虫についてインターネットで検索をしていると、中国原産の外来種チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。大阪狭山市で2017年に採集した標本から国内分布を初めて報告した春澤・宮武（2023）が和名を新称した。この外来種は日本だけでなく、韓国には2010年に侵入し、近年はトルコやフランスなどにも分布を拡大しているという（末長2023）。県内においても広く本種の寄生が確認されたと三重県病害虫防除所が病害虫防除技術情報を10月17日に発表し、花木類や果樹類などに対する被害防止のため産卵枝を除去するなどの対策を促している。すでに19都府県で本種に関する特殊報等が発表されているというから、国内での分布域も拡大している様子。県内での発生についてはYahoo! ニュースでも取り上げられるなどしたので、筆者も急遽（11月5日から）、自宅の庭や果樹畑、近くの海岸や津市内の知人宅を回って調べてみたところ、いるわ、いるわ。

津市内において産卵痕を確認した本種の寄主植物は、果樹でカキノキ（カキノキ科）、キンカン（ミカン科）、シークワサー（同）、ブルーベリー（ツツジ科）、ポポー（バンレイシ科）、花木ではアメリカアジサイ（アジサイ科）、カラタネオガタマ（モクレン科）、ゲッケイジュ（クスノキ科）、サザンカ（ツバキ科）、ニンジンボク（シソ科）、ハナミズキ（ミズキ科）、ヒトツバタゴ（モクセイ科）、マサキ（ニシキギ科）、リキュウバイ（バラ科）、ロウバイ（ロウバイ科）と極めて広い食性を示すものであった。いずれも今年生の枝先近くの細い枝にのみ産卵されていた（写真2）。

在来のアミガサハゴロモが主にカシ類に産卵し、丘陵地や山間部で見られることが多いのに対し、この外来種は広食性で住宅街の庭や果樹畑、また海岸地帯の樹木でも見られた。春澤・宮武（2023）や宮崎（2023）は街路樹や都市部の公園、緑地での調査に基づく記録を発表しているが、筆者はこれ



写真1 チュウゴクアミガサハゴロモ。（川越町，2024年11月3日）



写真2 ブルーベリーに産卵するチュウゴクアミガサハゴロモ。（津市，2025年11月10日）

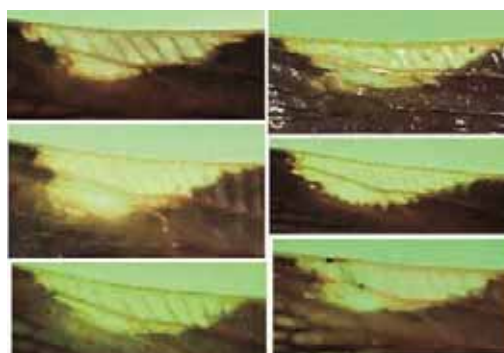


写真3 左前翅前縁の白色紋パターン

ら公園等では調査できていないものの、11月の2週間ほどの調査結果から判断して、県内の街路や公園での本種の生息数は少ないことが容易に推定できる。

昼過ぎの気温が15℃となった11月18日、近所の果樹畑でヤブガラシにいる成虫1頭（採集はできていない）を見つけたのを最後に津市内での調査を終えた。本種は灯火への飛来性もあるので（春澤・宮武2023，末長2023），本県においても今後，灯火採集で記録されることもあるだろう。なお，今のところ本種に対して使用する防除薬剤が無いため，筆者が育てているブルーベリーへの被害が心配である。幼虫と成虫の排せつ物に起因するすす病の発症も危惧される。

採集した成虫の前翅長は大きい個体で15mmほどで，近似の在来種より少し大きめであった。翅の白色紋は，前に開いた浅い三角形で輪郭が直線状であるというが（春澤・宮武2023），筆者の標本では多少の個体差が見られた（写真3）。アミガサハゴロモの前翅は黄緑色～暗緑色の粉でおおわれているが，本種にはこの粉がなく，茶褐色～鉄さび色である。

本県のアミガサハゴロモ科は，外来の本種が加わり4種となった。在来種の3種についても生態写真（写真4～7）を示しておく。なお，本種の学名については，属を *Pochazia* とする者や *Ricania* とする報文もあるが（春澤・宮武2023，外村・大原2024），原記載にあたった末長（2023）は，学名の表記としては *Ricania shantungensis* Chou & Lu, 1977が正しいというので，これに従った。

標本記録

カメムシ目ハゴロモ科 チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* Chou & Lu, 1977：川越町亀崎新田北部浄化センター，1頭，3-XI. 2024；津市河芸町中別保，2頭（ヒトツバタゴ），5-XI. 2025，2頭（ブルーベリー），10-XI. 2025，1頭（ポポー），14-XI. 2025；津市河芸町東千里田中川干潟，1頭（マサキ），14-XI. 2025，いずれも筆者採集。

文献

- 春澤圭太郎・宮武頼夫 2023. アミガサハゴロモに近似の外来種について（カメムシ目：ハゴロモ科）. 月刊むし，（628）：38-40.
 三重県病害虫防除所 2025. 病害虫防除技術情報第13号. <https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/>（2025年11月閲覧）
 宮崎豊 2023. チュウゴクアミガサハゴロモの東京都多摩西部での記録. 月刊むし，（634）：14-15.
 末長晴輝 2023. チュウゴクアミガサハゴロモの岡山県における初記録. 月刊むし，（634）：12-13.
 富田靖男 2018. 三重県のカメムシ目（半翅目）. みえ生物誌－昆虫Ⅲ（バッタ・カメムシ他），三重自然誌の会：98-222.
 外村俊輔・大原賢二 2024. チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977) の徳島県からの初記録. 徳島県立博物館研究報告. Bull. Tokushima Pref. Mus. (34)：77-80.

（しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1）



写真4 アミガサハゴロモ。（亀山市亀山里山公園，2012年11月5日）



写真5 アミガサハゴロモ *Pochazia albomaculata*.（津市西丸之内お城西公園，2006年8月23日）



写真6 スケバハゴロモ *Euricania facialis*.（紀北町海山，2007年8月20日）



写真7 ベッコウハゴロモ *Orosanga japonicus*.（津市美杉町大洞山，2011年9月7日）

もしかして三重県最古のヒロクチカノコ？

中 野 環

ヒロクチカノコは、本州中部から九州にかけて分布し、内湾河口域の泥地に半ば埋もれた石や木材の裏側など生息する大きさ15mmほどの巻貝です。三重県では川越町、桑名市、鈴鹿市、津市、松阪市、明和町、伊勢市で記録があり、日本各地で減少傾向にあります。三重県総合博物館には、津市河芸町東千里産の個体（Mo.15408：1975年5月26日、採集者不明）や桑名市下深谷部産の個体（Mo.12951：1978年10月22日、阿部茂標本）など、約50年前の1970年代後半の標本は所蔵されていますが、それより古い標本は見当りません。

桑名市教育委員会が1998（平成10）年度に行った桑名城下町遺跡外堀24地点の発掘調査で出土した貝類資料を調査したところ、三重県で最も古い時期に生息していた可能性があるヒロクチカノコの存在を確認したので報告します。

桑名城下町遺跡は、揖斐川や長良川の沖積作用によって形成された低地に発達した中世から近世の城下町跡です（図1-左）。外堀24地点は、現在の桑名市外堀24番地を指し、かつては桑名城下町の堀が広がっていた場所です。この地点で、19世紀前半（江戸時代後期）以降と考えられる遺構からヒロクチカノコが1個体出土していました（写真1）。揖斐川から離れた場所であるので、出土物の中からヒロクチカノコをみつけた時は、はたして近くにいた個体だろうか？という疑問をいただきました。



図1 左；桑名城下町遺跡位置図。桑名市教育委員会（2004）の地図を改変。赤丸：No.24地点、黒丸：No.30地点。右；伊勢桑名城中之絵図（国立公文書館）



写真1 ヒロクチカノコ（桑名市所蔵）

1644年（正保元年）に幕府が諸藩に命じて作成させた地図の中に、桑名城下町の地図（伊勢桑名城中之絵図）があります。これをみるとヒロクチカノコが出土した付近には堀があったことがわかります（図1-右）。当時の堀は自然流路を利用していたのでヒロクチカノコが生息する環境が広がっていたことが想像できます。この堀は、1908年（明治41年）の桑名町全図にも描かれていますが、1960年代の航空写真を調べてみると、堀の名残りである幅の狭い水路が認められるだけで、ヒロクチカノコが生息できる環境はありません。

外堀24地点の調査報告書には貝類の記述はないので、どのような状態で出土しかたのかは不明ですが、外堀24地点で確認された遺構は、19世紀前半以降に埋没したと考えられています（桑名市2000）。また、約100m西側に位置する外堀30地点では、混貝土層を盛土して整地化したことが報告されているので（桑名市2004）、堀付近に堆積した土砂で整地化した時にヒロクチカノコが混入したのかもしれませんが、埋没時期は、大正や昭和時代なのか？さらに古い時代であるのか？正確な生息時期を特定できないのは残念ですが、興味は尽きません。

参考文献

国立公文書館デジタルアーカイブ

伊勢桑名城中之絵図 <https://www.digital.archives.go.jp/gallery/0000000443>

桑名市教育委員会 2000. 桑名城下町遺跡発掘調査報告書～外堀24地点～. 39pp.

桑名市教育委員会 2004. 桑名城下町遺跡発掘調査報告書～外堀30地点～. 63pp.

（なかの たまき：度会町大野木1711-1）

カクレガニ（ピンノの一種）は宿主（二枚貝）がいなくても生きて行けるか？

ーコメツキガニとヒメアシハラガニのその後ー

上 田 利 彦

ここ数年、トリガイにはまり、活貝を買ってきては自分で剥き身にして食べています。剥き身にする際ほとんどの個体からカクレガニ（以下、ピンノ）が出てきます。ある日、トリガイを活かすために入れてきた海水の中に甲長5mmほどの小さなピンノがそれはそれは一生懸命泳いでいるのを見つけました。何らかの理由で宿にしていたトリガイから放り出されたのでしょうか、もともと宿主を探して住み込むにはこうして海底を泳いでいるのでしょうか、そうすると宿主がいなくても生きて行けるのか、あるいは一定の期間内に宿主を見つけないと死滅してしまうのか？と考えてしまいました。

二枚貝の器官の一部に取り付き栄養を摂る寄生関係なら短期間に宿主を見つけないとだめでしょう。しかし、貝を剥いたときの観察ではトリガイの特定の器官に取り付いているというよりは貝の中を自由に動きまわっているようであり、貝の組織に何らかの損傷がある様子もなさそうです。カクレガニという名の示す通り、隠れ家として二枚貝に住み込んでいて、おそらく二枚貝とピンノは共生関係で、宿主のトリガイには何のメリットもない片利共生のようです。そうすると、貝が取り込んだ栄養を横取りしているわけではないので宿主がいなくても捕食者がいなければ生きて行けるのではないかと考えました。

百聞は一見に如かず！ということで早速水槽を持ち出し、ピンノを収容しました。人工海水で水深は5cmほど、ピンノは外殻が見た目にも薄く弱々しいので、管理が簡単なように底砂は入れずにおきました。餌はトリガイが砂地に生息し砂泥が貝の中に入り込むことから、そこに餌があるのではないかと考え、コメツキガニ（本誌143号）の時と同じく藻類の微粉末飼料を水に溶いて与えることにしました。収容後、観察すると甲長3mm程度の個体（写真1）は水面近くまで泳ぎ浮遊しますが、甲長5mmを超える大きな個体（写真2）は泳ぎが得意ではなさそうで底をゆっくりと動いています（この2種は違う種の可能性があります）。



写真1 甲長5mm未満のピンノ



写真2 甲長5mmを超えるピンノ

しかし、数日経過するとほとんどの個体が底でわずかに動く程度になっていました。夜間、部屋の消灯数時間後、水替えのために明かりをつけると小さな個体は動いていますが大きな個体は寝ているのかほぼ動きません、しばらく観察しても動かないので、てっきり死んでしまったものと思いピンセットで潰さないようにそっとつまみだし、個体を詳しく観察しようとティッシュの上に置くとわずかにうごめいて、生きていた！ということが幾度かありました。水槽を揺らして刺激を与えるとやはり小さな個体は遊泳します。また、水槽には小さなパイプ状のエアレイションが入れてありますが、その陰に集まるわけでもなく、また水槽の四隅や端を好む様子も見られず、底全面に散らばっており、何かに隠れるというような動作は感じられません。水槽の大きさは15×19cmでそこに5mmを超える個体が7匹、小さな個体が20匹ほどを収容しており、互いに干渉しないようにするために散らばっている可能性もありますが、互いに重なり合っている、あるいは動く先で互いにぶつかっても喧嘩するような様子もありません。と、ここまでが観察した状況です。

さて、そもそも二枚貝に片利共生する目的は捕食者から身を守るのが主目的と思われるのですが、おそらくそれは生まれながらにして本能的に行動するものと思われます。すると今飼育している個体は宿主を探して散らばっていて、見つからないから途方に暮れているのか？それともここには捕食者がいないと判断して散らばってのんびりしているのか？いろいろ考えてしまいます。何はともあれ早いものは飼育を始めて4か月経過しました。この間、死んでしまう個体も数個体ありましたが、結果として、ピンノは宿主がいなくても生きていけるようです。話によるとタイラギという貝にはカクレガニのほかカクレエビもいるそうで、機会があれば！と思っています。

さて、本誌143号で報告したコメツキガニとヒメアシハラガニのその後ですが、コメツキガニは4月22日に虫サイズの個体の鉗脚（かんきやく＝はさみ）が赤く色づいたため（写真3）婚姻色が出たと判断して必要以上に刺激しないようするため、それまで隔週で底砂を水道水で洗い、水替えを行っていたのを止め、足し水と水槽を傾け揺動し底砂の天地返しを行い干潟の環境の創出をしたつもりでしたが、やはり水質の悪化が避けられず翌月相次いで死なせてしまいました。改めて干潟の機能や環境の複雑さを思い知らされました。一方のヒメアシハラガニは共食いにより中間の大きさのものが一匹残り、エビのむき身などを与え飼育継続中です。水が蒸発し水槽全面が陸地化すると穴を掘り隠れますが、一部でも水があると穴は掘らず動き回っています。こちらは餌が固形物なので水質には無頓着なようです。



写真3 鉗脚が赤く色づいたコメツキガニ（4月22日）

（う え だ と し ひ こ 津市久居一色町176-1）

編集後記

積極的な投稿のおかげでこのところ原稿集めに苦労しないですんでいます。今号もバラエティに富んだ内容になり、にぎやかな誌面になったと思います。次号は3月発行予定ですので、お気軽にご投稿下さい（善）。

自然誌だより146号 Mie Natural History Research Group News, No.146

発行日 2025年12月15日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp